豊後高田市

田染荘小崎の農村景観

1200年もの歴史を持つ田染荘は、
昔ながらの田園風景が
今もなお色濃く残されています。

姫島村

姫島の「魚付林」

海岸や近くの山に育成した林が海に
木陰を作り、魚の産卵を助け、魚を育
てます。

国東市

くにさき七島藺表

畳表の材料となる七島藺は国東市が
唯一の生産地で、年間千枚ほどしか
生産されない畳表を生産者が
1枚1枚丁寧に織り上げています。

認定地域各市町村の特徴的なGIAHS要素

国東半島宇佐地域は、九州の北東部、
瀬戸内海の西部に突き出した丸い半島を中心とした
4市1町1村で構成されています。
認定地域各市町村において、
「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環システム」
の特徴的要素があります。

宇佐市

院内町の両合棚田

日本の棚田百選にも認定された
「両合棚田」は、大正時代に架けられ
た石橋を中心に自然豊かな景観が広
がっています。

日出町

日出の湧水で育った「城下かれい」

「城下かれい」は日出城址から見渡す
別府湾の海中に湧き出た湧水で
育つマコガレイで、泥臭みがなく非
常に美味となっています。

杵築市

守江湾のカブトガニ

杵築市守江湾の干潟には、「生きてい
る化石」と呼ばれるカブトガニが
今でも生息し、環境の豊かさを象徴
しています。

クヌギ林と
ため池がつなぐ
国東半島・宇佐の
農林水産
循環システム

国東半島宇佐地域世界農業遺産
Kunisaki Peninsula Usa GIAHS

国東半島宇佐地域世界農業遺産

認定１０周年記念シンポジウム 記録冊子

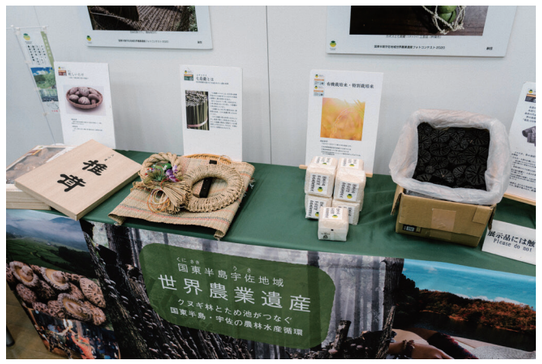
日時 2023. 11.21 火 22 水

会場 くにさき総合文化センター（アストくにさき）

【主 催】国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会
【事務局】大分県農林水産部農林水産企画課

国東半島宇佐地域 世界農業遺産
認定１０周年記念シンポジウム

大分県国東半島宇佐地域（豊後高田市、杵築市、宇佐市、国東市、姫島村、日出町）の
「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環」が世界農業遺産に
認定され10周年を迎えました。認定地域のさらなる活性化を図るため、
記念講演や活動事例等を紹介する、認定10周年記念シンポジウムを開催しました。
この冊子は、当シンポジウムの記録をまとめたものです。



目次

2023.11.21 火

13:00- 開会式 P.4

13:30- 記念講演 「持続可能な地域づくりを目指す農業遺産」 P.8

14:30- パネルディスカッション１ 「国東半島宇佐地域の活性化」 P.10

2023.11.22 水

9:30- 基調講演
「世界農業遺産：今後の地域活性化と、それに向けた国際連携戦略を考える」 P.14

10:30- パネルディスカッション２ 「世界農業遺産を未来の世代に繋ぐ」 P.16

13:00- ユース取組発表 P.20

14: 15- 聞き書きユースセッション P.24

15:30- 閉会式

各プログラムの 記録動画 マークの横にある二次元バーコードから
シンポジウムの記録動画をご覧いただくことができます。
記録冊子とあわせてご視聴ください。

ごあいさつ

国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会 会長

林　浩昭

「国東半島宇佐地域世界農業遺産認定10周年記念シンポジウム」開催にあたり、主催者を代表しまして一言ごあいさつ申し上げます。

ここ「国東半島宇佐地域」は、2013年5月に国連食糧農業機関（ＦＡＯ）から「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環」として世界農業遺産（ＧＩＡＨＳ）に認定されました。

このたび、認定10周年を記念しまして本シンポジウムが開催されますことは、認定地域内6市町村の首長様をはじめ、多くの関係者の皆様のご支援、ご協力の賜であり、深く感謝申し上げます。そして本日、認定地域内外からご参加いただきました多くの皆々様を、心から歓迎いたします。

お集まりの皆様には、認定の際にご尽力をいただいた、公益財団法人地球環境戦略研究機関の武内和彦理事長様、元大分県副知事の小風茂様、総合地球環境学研究所の阿部健一教授様、はじめ多くの関係の皆様にご臨席賜りました。また、これまで地元で世界農業遺産の機運醸成にご尽力いただいている大分県議会や認定市町村議会の議員の皆様、さらには、それぞれの地域でご活躍されている皆様など、多数のご臨席を賜り、重ねて御礼申し上げます。

加えて、当協議会は、大分県、大分銀行、JA大分信連、豊和銀行、大分みらい信用金庫、大分県信用組合様より、「おおいた世界農業遺産次世代継承ファンド」の設立を通じご支援いただいていることに対しましても、改めて感謝申し上げます。

さて、私どもは、伝統的な農林水産システムの「次世代への継承」と、世界農業遺産ブランドを活用した「地域の元気づくり」を柱に、アクションプランに基づき取り組みを進めてまいりました。

「次世代への継承」では、小・中・高校生や大学生への教育活動を続けていますが、私自身、ＧＩＡＨＳ（世界農業遺産）の講義を通じ、多くの生徒から「地域の魅力を再発見することができ誇りに思う。」などの感想を耳にするたび、世界農業遺産が若い世代に浸透しつつあることを実感しています。一次産業にかかわる生産者の皆様方の誇りの醸成とともにこの地域を担う次世代の教育にも力を入れてまいりたいと考えています。

「地域の元気づくり」では、ため池や史跡を巡るウォーキングイベントの開催や、原木しいたけのほだ場での収穫・試食体験が、JR九州が運航するクルーズトレインのコースに選定されるなど、地域の方々の取り組みが新たな発展にもつながっています。

今後とも、伝統的な農法や文化などの持続的な営みを次の世代に引き継ぐため、地域の元気が創出される取り組みを進めてまいりたいと考えています。

さて、本日は、記念講演としまして、地球環境戦略研究機関の武内理事長を講師に「持続可能な地域づくりを目指す農業遺産」と題し、ご講演頂きます。

また、パネルディスカッションでは「国東半島宇佐地域の活性化」をテーマに、地元で地域活性化に取組んでいる6名の方に、それぞれの活動事例を紹介いただくとともに意見交換をしていただきます。

明日は、基調講演としまして、東京大学大学院農学生命科学研究科の八木教授を講師に「世界農業遺産：今後の地域活性化と、それに向けた国際連携戦略を考える」と題し、ご講演いただきます。

そして、パネルディスカッションでは、「世界農業遺産を未来の世代に繋ぐ」をテーマに、地元で保存・継承活動に取組んでいる6名の方に、それぞれ意見交換をしていただきます。

さらに、午後にはユースの部として、小中学生による世界農業遺産の取組み発表、高校生による聞き書きユースセッションと盛りだくさんの2日間となっており、私も大変楽しみにしているところでございます。

終わりになりますが、本シンポジウムには日本各地で認定されている農業遺産関係者の皆様も多くご参加いただいています。このシンポジウムが、国東半島宇佐地域の新たな出発点になりますとともに農業遺産を通じた地域づくりを考える有意義な機会になりますことも祈念致しまして、簡単ではありますが開催のご挨拶とさせていただきます。

開催地挨拶

国東市長

松井　督治

皆様、こんにちは。国東市長の松井でございます。

本日は、「世界農業遺産認定10周年記念シンポジウム」にご参加いただきありがとうございます。開催市を代表し、皆様を歓迎致しますとともに、一言、ご挨拶を申し上げます。

本日は、「国東半島宇佐地域世界農業遺産認定10周年記念シンポジウム」が大勢の皆様のご参加のもと盛大に開催されますことを、心からお礼申し上げます。

国東半島・宇佐地域は、「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環システム」が認められ、平成25年5月に世界農業遺産認定を受けて以降、10年が経過しました。

長い年月にわたり、国東半島・宇佐地域で行われてきた農林水産業の営みや、歴史、伝統文化が世界的に価値あるシステムとして評価されたことは、大変光栄であり、認定活動における林浩昭会長をはじめとする多くの関係者のご尽力に改めて敬意を表する次第でございます。

本日は、公益財団法人地球環境戦略研究機関理事長の武内和彦様より「持続可能な地域づくりを目指す農業遺産」の記念講演をはじめ、総合地球環境学研究所の阿部健一教授をコーディネーターとして、関係者による「国東半島宇佐地域の活性化」をテーマとしたパネルディスカッションが行われるほか、明日も基調講演やパネルディスカッションが行われるということで、どのように議論が深まっていくのか、大変楽しみにしております。

国東市におきましても、今後も「世界農業遺産」という地域ブランドをフル活用し、市の基幹産業である一次産業から産出される農林水産物に付加価値を付けることにより「儲かる農業」を目指すとともに、地域ブランド認証品である「原木乾しいたけ」、「米」、「茶の湯の炭」、そして国内において唯一の生産地である「シチトウイ」の産地化・ブランド化を推進していきたいと考えております。

結びに、本シンポジウムの開催にご尽力をいただきました関係者の皆様に、厚くお礼を申し上げますとともに、このシンポジウムが本日ご参加いただいております皆様にとって実り多いものとなることを祈念し、開催市を代表して、歓迎の挨拶とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。

祝辞

大分県知事

佐藤　樹一郎

「国東半島宇佐地域世界農業遺産認定10周年記念シンポジウム」が、ここ国東市において盛大に開催されますことをお祝い申し上げます。また、全国各地から多くの皆様にお集まりいただき心から歓迎いたします。

さて、地域が一丸となって築き上げ、これまで大切に守り、育んでこられた国東半島・宇佐地域の農林水産循環システムが、世界農業遺産に認定されて、早いもので10年が経過いたしました。

この間、体験ツーリズムの構築、地域資源の可視化、ブランド認証制度の確立、次世代継承教育など、林会長をはじめとする推進協議会の会員を中心に、多岐にわたる取り組みが進められてきました。

なかでも、高校生が農林水産業に従事される方々などを取材し、記録する「高校生聞き書き事業」は、国の専門家会議から、市民と科学を結び付ける重要な手段になり得る取組として高い評価を受けています。このような価値ある遺産を守り、育て、次世代に継承するための取り組みに対し、深く敬意を表するとともに感謝申し上げます。

明日の記念シンポジウムでは、小中学生や高校生がそれぞれのプロジェクトを発表することになっておりますが、先人の努力と知恵に育まれ、脈々と受け継がれてきた国東半島宇佐地域の歴史文化が、若い世代にも引き継がれていくことを大変嬉しく思います。

認定10年目を迎えるこの節目に、関係する皆様が広く参集し、認定地域はもとより、他の地域の方々とも相互に連携し、国内外に情報発信することは、大変意義のあることだと思います。

そして、世界農業遺産の認定効果が、農林水産業の枠にとどまらず、観光やものづくりといった他の産業にも広がることで、次の10年、さらにその先の未来においても、地域の活動が活力に満ち、“生きた”伝統として、次の世代に受け継がれていくことを切に願っています。

結びに、国東半島宇佐地域世界農業遺産の今後益々の発展と、ご参会の皆様のご健勝、ご活躍を祈念しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

本日は誠におめでとうございます。

ビデオメッセージ

国際連合食糧農業機関 駐日連絡事務所 所長

日比　絵里子

皆様こんにちは。FAOの日比絵里子です。まずは、国東半島宇佐地域世界農業遺産認定10周年、誠におめでとうございます。クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐での循環した農業、生態系システムが世界的にも価値があると認められたのが10年前の認定でした。

そしてこの貴重な遺産を守るための取り組みを未来につなぐ節目となるのが本日のシンポジウムであると理解しております。このような場所でご挨拶をする機会をいただき大変光栄に思います。皆様もよくご存知の通り、FAOは世界農業遺産の認定を実施してまいりました。現段階では世界で24カ国78地域、日本では15地域が認定されています。10年前と比べ、国も地域も格段に増えました。

一方、今日慢性的な栄養不良に苦しむ人は世界で7億人以上、約10人に1人ぐらいです。10年前よりも悪化しています。
その原因は 新型コロナウイルスの感染拡大による経済・社会的な打撃、世界各地での紛争、 ウクライナでの戦争が世界に与えた影響、そして気候変動のもとで拡大する、気候災害による被害などが挙げられます。残念ながら 2030年までに飢餓をなくすことは難しいと予測します。今、わたくしの背景にもありますが、今年の世界食料デーのテーマは「水資源」です。地球上で農業や飲み水に使用できる淡水はなんと2.5%、その貴重な淡水の3/4が農業に利用されています。

ところが、淡水はどんどん失われており、この20年間で1/5がなくなりました。気候災害は頻度や規模が拡大しており、また生物多様性も失われる一方です。今、地球にとり重要なのは、少ない水や資源で環境に負担をかけないで食料をより多く生産する方法を見つけることです。これはすなわち劣化した土地や生態系を回復させることでもあり、地球の温暖化を1.5℃で抑えることでもあります。

このような状況の中で水資源の確保が困難だったにも関わらず、クヌギ林とため池を利用して食料や生計を確保し、豊かな農耕文化や食文化に彩られる国東半島宇佐地域からのメッセージは、世界にとり非常に重要です。

FAOは課題解決を目指し、よりよい生産、よりよい栄養、よりよい環境、よりよい生活を組織の柱と掲げます。今ある農業、食料システムをもっと効率的で公平で、ショックに強い持続可能なものに変革することを志します。課題が満載の今のこの時代にこそ、世界の農業遺産が長年培ってきた 叡智は 地球レベルの問題解決に貢献する貴重なヒントを含んでいるのです。

これからの10年間も国東半島宇佐地域のGIAHSの魅力や知見を世界に発信していただき、世界の様々な課題の解決にご貢献いただけることを祈念し、私からのご挨拶にかえさせていただきます。改めて皆様おめでとうございます。

開会式の様子は二次元バーコードから
動画でご覧いただくことができます。

記録動画

2023.11.21 火

記録動画

記念講演

「持続可能な地域づくりを目指す農業遺産」

講師

公益財団法人地球環境戦略研究機関（IGES）理事長
武内 和彦氏

東京大学大学院　農学系研究科修士課程修了後、国連大学副学長や東京大学サステイナビリティ学連携研究機構機構長、国連大学サステイナビリティ高等研究所客員教授などを歴任。現在は、公益財団法人地球環境戦略研究機関の理事長、東京大学未来ビジョン研究センター特任教授。
国連食糧農業機関等の主導する世界農業遺産・日本農業遺産の認定にも深く関わる。

世界農業遺産の認証と登録への経緯

国東半島宇佐地域の世界農業遺産認定の際には、広瀬勝貞前大分県知事と、国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会の林浩昭会長にプレゼンテーションをおこなっていただきました。世界農業遺産を広めるうえで、大きなサポートをいただいたことに感謝しております。

気候変動などによる地球環境の危機が報じられており、持続可能性を追求するための研究や教育を実施してきましたが、近年ではSDGsの普及によって、さらに一般の方にも浸透してきたのではないでしょうか。SDGsと世界農業遺産は、とても深い関わりを持っていると思います。

2022年には「昆明・モントリオール生物多様性枠組」が採択されました。人間活動の進化とともに進んだ自然の劣化を食い止め、回復軌道に乗せるために、日本が特に重視すべき「30by30」など数値目標が追加されています。世界農業遺産に求められるのは、自然を活用しながらも環境改善にどれだけ貢献できるかです。自然の恵みを享受しながら生き物を育み、自然と共存する地域づくりが大切です。

世界農業遺産の認定基準や仕組み

認定には社会、経済、環境などの要素をバランスよく保つ「持続可能性(サステナビリティ)」の追求が重視されます。災害や経済などの変化に対するレジリエンスの高い強靭な体制を備えているか、多様な作物を育てることで安定・持続的な生産を維持しているか、担い手不足解消のための人材育成への取り組みなど、全ての要素が揃ってこそ高い評価を得られます。

これからはそこに住む地域の人だけが取り組むのではなく、地域外からのボランティアや企業などの関わりを強化しながら地域を創造していくことが大切です。

農業生産と環境の保護

では、農業生産と環境保護の両立を行ううえで、どのような取り組みが必要か、近年特に注目を受けているのは以下の4つの項目のような内容です。

1.単一作物ではなく、さまざまな作物を生産することで、安定的で持続的な農業へ
2.自然を生かした災害対策で、長期的な持続性・経済性の確保
3.少子高齢化や農林水産業の担い手不足解消に向けて、民間、ボランティア団体、地域の人を巻き込むことで新たな担い手を創造
4.日本初認定の世界農業遺産、佐渡島の「朱鷺と暮らす郷」の米づくりの事例のような、自然生物の保護と農作物栽培を両立する6次産業の推進

現在、日本国内では15の地域が世界農業遺産に認証されています。人間は自然の恵みを活用しながら、生き物を育む環境づくりや農業の活性化を目指さなければなりません。自然を守ることで人々の活動に活かされるような循環型社会の形成が大切です。

プラネタリーバウンダリー(地球の限界)という言葉が叫ばれているように、生物多様性は限界を超えているといっても過言ではありません。近年では海洋プラスチックなどの新規化学物質も大きく問題視され、国際条約について議論されている最中です。

また、国連食糧農業機関(FAO)などが1960～1970年代に推進した大規模な農業技術革命「緑の革命」によって、それまでの伝統農法から近代的農業へと変化しました。生産性は高まりましたが、その反面、窒素やリン酸などが使われ、これらの成分が生態系や地球環境に負荷をかけてしまっていたのです。これから目指すべきは自然が守られ、人間が多様な恵みを享受する「多層な緑の革命」です。さまざまな制約がある中で、いかに豊かな社会をつくるかが課題とされています。

大分県の名産品であるしいたけは、海外の人からは“木から農作物が生まれる”という見方で、とてもユニークな農作物として注目されています。また、国東市のようにため池を活用した水利システムは非常に特徴的で、こうしたシステムを形成していることこそが、世界農業遺産に認定された特質と捉えられるでしょう。同じような水利システムでは、スリランカのタンクシステムや、2017年に世界農業遺産に認定された大崎耕土(宮城県大崎地区)があります。これらの地域との交流によって、地域の在り方やアジアの共通性を知るとともに、国東市のユニークさも際立ってくるのではないでしょうか。

しいたけ栽培単体での認証ではなく、自然と共存しながら暮らしを営んできた伝統がストーリーとして紡がれてきた歴史を、「生きた遺産」として将来にわたって知恵の継承をするためには、次世代への教育も必要です。出前授業や体験学習などを通じて子どもたちが農業に関心を持つ機会を増やし、いつか農林水産業の維持・継承に貢献してくれればうれしいですね。他の世界農業遺産認定地域と連携した魅力発信も効果的かもしれません。持続可能な地域づくりによって、里山、里海を守り、豊かな社会づくりを目指しましょう。

2023.11.21 火

記録動画

パネルディスカッション1

「国東半島宇佐地域の活性化」

コーディネーター

総合地球環境学研究所 教授

阿部　健一氏

国連食糧農業機関、世界重要農業遺産の専門委員として世界農業遺産・日本農業遺産の認定に係る現地調査等を実施。
国東半島宇佐地域 世界農業遺産推進協議会委員として、国東半島宇佐地域世界農業遺産の認定、取り組みにも深く関わる。

「変えていく遺産」世界農業遺産をどう継いでいくか

パネルディスカッションでは、阿部健一氏をコーディネーターに、国東半島宇佐地域でさまざまな事業や取り組みをおこなっている6人のみなさまにパネリストとしてご登壇いただきました。

建造物や遺跡などの不動産を対象として認定される「世界遺産」とは異なり、世界農業遺産は「人」と「農業活動」を対象として認定されます。人が関わっていることこそが世界農業遺産の大きな特徴であることから、変わらない、変えてはいけない部分をしっかりと継承しながらも、時代の変化に合わせて、「良い方向に変化させていく遺産」でもあるといえます。

地場産業の継続のために、「地域のあたりまえ」をどう伝え、関係人口を増やすか？

コーディネーターの阿部氏からは「ため池は先人たちの知恵。しかし全国ではその役割が正確に理解されていないことも多く、危険箇所として過小評価されている印象があります」という意見がありました。連携システムの大切さをしっかりと学べる環境を整備することによって、昔の人の知恵や伝統を若い世代へ正確に伝えていくことも重要となります。

昔からの伝統や活動を続けてきた地元のみなさんにとっては、自分たちの日常が世界農業遺産として評価されることについて、驚きの気持ちもあったという声が聞かれました。

地域の人の当たり前は、外の人から見れば特別なのだと、世界農業遺産認定を機に自分が住む地元の魅力を再発見したことで、国東半島で営む活動の価値を見出すことにもつながりました。

改めて、地域の人が地域を思い、大切にしたいと思えるふるさとへと成長させていく―。

これも世界農業遺産に認定された地域としての大切な役割なのかもしれません。そのために、伝統や技術を後世へ伝えることが大きなテーマです。

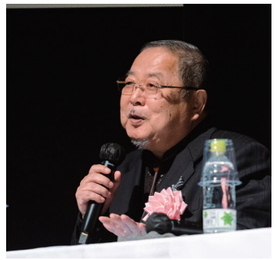
地域の良さを知ってもらい、地域活性化につなげていくために、今後どのような取り組みや活動が必要か？

世界農業遺産の地で活躍するパネリストのみなさんからそれぞれの事業や活動をご紹介いただきました。農林業や観光など業態はさまざまですが、共通して大切にしているのは、「豊かな自然が当たり前に存在することへの感謝」と、「この環境を維持しながら、よりよい地域づくりをしていきたい」という気持ちです。

みなさんの活動に欠かせない自然との共存・共生を軸に自身の活動を再確認し、伝統を守りながらも時代に合わせてアップデートしています。多くの魅力を持つ国東半島宇佐地域で営まれてきた農業システムや伝統文化。

10年の節目に改めて「世界農業遺産とは何か」を考え、次世代への伝承を意識することが、地域活性化にもつながるのかもしれません。

2023.11.21 火　パネルディスカッション1　「国東半島宇佐地域の活性化」



世界農業遺産旭日プロジェクト　事務局長

清原　正義氏

国東市国東町旭日地区において、ため池や史跡を巡るウォーキングイベントの開催など、世界農業遺産を活用した地域活性化の取組をおこなう。

平成27年に「世界農業遺産旭日プロジェクト」を立ち上げ、ため池の維持管理や、ため池を巡るウォーキングイベントなどを開催し、地域文化の魅力発信に尽力。取り組みのひとつとして、地域の子どもたちによる米づくり体験を受け入れています。米づくりの全工程を体験することで、ため池の大切さを理解してもらいたいという思いがあります。

活動を通じて地域の人たちの環境保全に対する意識も高まり、草刈りなどの整備に積極的に参加してもらえるようになりました。今後も体験学習やウォーキングイベントの開催、地元ガイドの育成などを通じて交流人口の増加を図り、「世界農業遺産の里」としての知名度アップに貢献しながら、地域活性化につなげたいです。

荘園の里推進委員会　事務局長

藏本　学氏

中世の風景が今もなお残る田染荘小崎地区において、水田や山林などの景観保全、伝統行事などの地域資源を活用した都市と農村の交流を行っている。
(instagram@tashibunoshouen)

グリーンツーリズムのサポートをしたことがきっかけで豊後高田市の魅力を知り、2011年に田染荘に移住しました。現在は中高生対象の個別指導塾を運営しながら、農家としてマコモダケを栽培しています。中世から続く景観保全に地域全体で取り組む「荘園の里推進委員会」の事務局長として、御田植祭や収穫祭、荘園マルシェなどを開催したり、荘園領主制度によって全国各地に“荘園ファン”を増やしたりといった取り組みによって、都市農村交流人口が増加。海外の農業従事者の視察も増えています。また、移住される方もいて、小中学生も増えました。

高齢化が深刻な地域で活動を継続していくためにも、持続可能な仕組みづくりや、近隣地域との連携が必要です。今後はさらに地域産品や加工品の販路拡大にも力を入れていきたいです。

宇佐市地域おこし協力隊

伊藤　高広氏

フォトグラファーとしての経験を活かしてＳＮＳによる広報活動や写真展の開催等を行い、関係人口増加につなげ、地域の再生を図っている。(instagram@ryoaitanada)

両合棚田の周知拡大に向け、SNSなどで情報発信をしてきました。コロナ禍では近隣に住むSNS利用者やインフルエンサーへ呼びかけを行うことで、公式SNSのフォロワーが増え関係人口が増加しました。また、魅力発信のための取材を通して知ったのが、過疎化によって荒れたクヌギ林の存在です。太ってしまい利用価値のなくなったクヌギや雑木を利用するため、グリーンウッドワーク(生木の木工)による色えんぴつ作りの里山体験や、七島藺(しちとうい)と組み合わせた椅子などの制作も行っています。

これからもフォトグラファーとして魅力発信しながら、眠った資源を探しだし、この地域独自の新たな可能性を探求していきたいです。

しいたけ生産者

橋上　智和氏

「JR九州クルーズトレインななつ星in 九州」の農業体験コースとして、原木しいたけ ほだ場での収穫・試食体験の受け入れなど普及・拡大による地域活性化を図っている。

家業を受け継ぎ、原木しいたけを生産しています。隣接するため池の水を活用しながら、袋かけなど手をかけることで品質向上、収穫量アップを目指しています。

国東市の若手生産者による自主研究グループ「原木しいたけ国東半島会」の発足時からのメンバーとして活動をしています。また、大学との連携で収穫体験を実施したり、JR九州クルーズトレイン「ななつ星in九州」のツアーとして収穫・試食体験を受け入れたりと、現場体験の機会を増やしたことで、原木しいたけの魅力発信ができたと感じています。生しいたけと乾しいたけの食べ比べ、調理に菊炭を使うなど、国東市の魅力向上につながるような工夫もしています。しいたけ栽培に興味を持ってくれる若者も増えてきているので、次世代の担い手確保につながればうれしいです。

The Japan Travel Company

ポール　クリスティ氏

日本全国で歩く旅を中心としたインバウンド観光客誘致を通じ、各地でその地方の発展・貢献・地域交流を産みながら地方創生につながる活動をおこなう。

香港の大学教授と中山道を歩きながら地域の研究をする「Walk Japan」においてガイドとして関わり、その後社長を経て、現在はCEOとして活動しています。国東市をはじめ日本各地でのツアーを企画し、特に西洋人をターゲットとして募集をしています。外国人観光客の目的は多様化していて、行先も首都圏から地方へとシフトされつつあり、日本の本質を探る旅に注目が集まっています。大田に移住し、「Walk Japan」の予約手配業のため「The Japan Travel Company」を設立、その後、農業分野に特化した「Ota Estates」を設立し、3社それぞれがコミュニティープロジェクトにも関わりながら、観光産業を軸に、農林業の活性化、空き家問題の解消、教育水準の向上など、地域を活性化する活動が循環し、地方創生につながっていると感じています。海外からの移住者代表としても、さらに日本の良さを全国、海外へ発信していきたいです。

くにさき半島山や

山口　しのぶ氏

純国産クヌギを用いたしいたけ栽培、調味料の開発・販売、活用レシピの考案・提案等でしいたけの魅力を発信し、ファン獲得による地域の活性を図っている。

乾しいたけを調理するのは、手間がかかるイメージが強く、特に若い世代に使ってもらえないことが課題でした。購入年齢層を広げるために、乾しいたけ特有のうまみを気軽に楽しめる出汁パックを開発。また、学校や親子サークルなどで、乾しいたけの魅力を伝える機会を増やしました。

地元ではしいたけの栽培方法を知っている子どもが多く、世界農業遺産についても学校で学んでいます。そんな子どもたちのリアルな学びの場として圃場を開放しています。実際の栽培現場を見て、新鮮なしいたけを食べると「しいたけは苦手だったけど好きになった」という声も聞けるようになりました。自然環境や水など、栽培に欠かせない大切な要素も体感できるきっかけを増やし、後世へとつないでいきたいです。

2023.11.22 水

記録動画

基調講演

「世界農業遺産:今後の地域活性化と、それに向けた国際連携戦略を考える」

講師

東京大学大学院農学生命科学研究科　教授
八木　信行氏

東京大学農学部卒業後、農水省に入省。米国ペンシルバニア大学の修士課程を修了し、MBAを取得。農水省を退職後、平成29年に東京大学大学院 農学生命科学研究科の教授に就任、現在に至る。
令和元年より国連食糧農業機関　世界農業遺産プログラムの科学アドバイザリー会合委員を務め、世界農業遺産・日本農業遺産の認定にも深く関与している。

FAO(世界食糧農業機関)の活動と世界農業遺産の位置づけ

ローマに本部を構えるFAOは、食料の安全保障と栄養、作物や家畜、漁業と水産養殖を含む農業、農村開発を進める国連内の先導機関です。その使命として、「食料の安全保障・飢餓の撲滅・栄養失調の撲滅」があります。さらに「農林水産業をより持続可能な形にする」「地方における貧困縮小」「フードシステム(グローバル社会の中の小規模な農家)を支える」「生業への悪影響軽減」にも焦点をあてています。その流れの一環が「世界農業遺産」です。

世界農業遺産がスタートして20年以上が経ちますが、当初に比べてFAOでは、世界農業遺産への注目が高まっています。理由のひとつが、大資本の農業・漁業によって小規模農家や漁業者を圧迫し、地方の貧困や生業への悪影響に対する懸念です。本来、農業・漁業は自然と密着し、小規模であっても丁寧に生産されたものの方が高く評価されるべきなのです。グローバル社会において小規模な経営体を評価する仕組みとして、世界農業遺産はますます注目をされることでしょう。

世界農業遺産の認定の仕組み

世界農業遺産は、世界各地域を代表する9人の専門家からなる科学助言グループによって、FAOが定める認定基準と保全計画(アクションプラン)に基づいて審査・認定されます。

認定基準には5つの項目がありますが、社会、経済、環境のバランスを保つ「持続可能性(サステナビリティ)」も重視されます。どれかひとつの要素を優先するのではなく、全てのバランスが整って循環していることが大切です。

国東半島が評価されたポイントとは

国東半島のしいたけ栽培は長い歴史を持ち、今もなお自然のサイクル次第で栽培、収穫されている点が高く評価されました。作り手の観察眼や、自然に対する敬意があってこそ成り立つものです。また、国東でのみ生産されている「七島藺(しちとうい)」も、伝統的な栽培品種として評価されています。近年では簡単に栽培できる品種の需要が高まっていますが、それでは伝統的な作物が廃れてしまいます。持続可能性の視点からも強い評価ポイントです。保水が難しい地域ならではの知恵と工夫で、ため池による保水システムを現代まで利活用していること、自然の地形を利用した昔ながらの区画が残る水田も評価されました。

姫島村へ飛来するアサギマダラの保全活動など生物多様性の保全に地域を上げて取り組んでいることも重要なポイントです。また、漁業期節によって、特定の漁業を一定期間、排他的に営むことを地元の人たちの合意に基づいて認める「漁業権」は、地域住民による自然資源の利用を提唱するノーベル経済学賞受賞者、エリノア・オストロム氏による「オストロム型」の管理の好例です。いずれも地域のみなさんの長年の努力なくしては守れない大切な伝統技法や文化が、後世に残したい財産として高く評価されたといえるでしょう。

地域活性化のための国際連携候補地の事例

今後は国際的な知見の共有が求められています。地域活性化の一つとして、国東半島宇佐地域と同様の事例を抱えている世界農業遺産の認証地域との連携も求められるでしょう。ここでは2つの地域を紹介します。

1.中国・慶元県の椎茸栽培

©Chen Shiping（https://www.fao.org）

現在、中国のしいたけの約9割は菌床栽培でつくられています。一方、中国の山中で営まれてきたしいたけ栽培には「Duohua」という手法が用いられ、風や天候など自然のサイクルに影響される手法でつくられてきました。その歴史は800年近くにもなります。この伝統手法では小規模経営の農家では生産量が安定しないことから、ここ30年ほどで近代手法や代替手法が導入されてきました。

しかし、できるだけ伝統手法に近い形での栽培を取り入れていることから、800年の歴史の土台を発展させた形として世界農業遺産に認定されています。収穫後の材料は有機肥料や家畜のえさにするなど、生物多様性の保全にもいかされています。

2.スペイン・バレンシア地域

©Bruno Almela（https://www.fao.org）

2019年に世界農業遺産に認定。スペインでは降水量が少ないため、水田はおろか野菜畑もほとんどありません。しかしバレンシアでは「都会化の中での農業」を課題とし、野菜栽培地域としての歴史的灌漑システムがあります。伝統的な水の配分ルールを尊重し、用水路の修繕を繰り返しながら800年以上維持し続けています。

また、バレンシアは魚介料理のパエリア発祥の地としても知られ、漁業権による湖水漁業管理を行なっています。漁場の割り当ては毎年くじ引きを行ない、農民たちの間で起こる灌漑用水など水に関するトラブルを解決するためには「水裁判」を実施するなど、地域全体で水を大切に扱う風潮が根づいています。

2023.11.22 水

記録動画

パネルディスカッション2

「世界農業遺産を未来の世代に繋ぐ」

コーディネーター

東京大学大学院農学生命科学研究科

香坂　玲氏

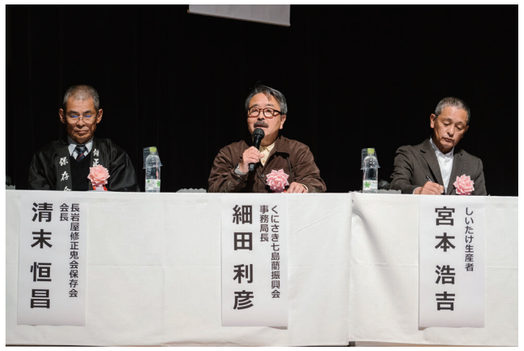
国連の生物多様性条約事務局での経験を生かし、生態系の保全と活用、国際的な制度構築に従事。世界農業遺産やユネスコ登録地で、過疎や担い手の減少に悩む農林業の土地利用と時空間・風土に根差した産品のブランド化に取り組む。IPBESのビジネスアセスメントの統括執筆責任者で、フィールドと理論を結びつける研究に注力している。

「山から海にむけての恵み」のストーリーをつむぐ。

高齢化や過疎化による人口減少から、地域の伝統文化を継承する担い手不足という厳しい現状もある中で、変革や工夫によって地域の遺産を継続していく方法とは？山・海の保全活動に携わるみなさんと一緒に考えました。

後継者不足や、気候変動の影響について

後継者不足は産業の衰退を招き、貴重な地域の文化がなくなってしまう可能性もあります。さらに近年の気候変動によって、自然の恵みを享受する産業は少しずつ変化しているといいます。例えば、天念寺修正鬼会で使う松明の材料が鹿の被害にあったり、七島藺の植え付けから収穫までの期間が短くなったり、水揚げされる魚種が変化したりと、現場を知るみなさんが目の当たりにしている変化はたくさんあります。後継者の育成と、気候変動への対応の両立が必要です。



国東半島宇佐地域は、山・海ともに生物や地質が豊かな地域です。山と海のそれぞれが持つ歴史や特徴をつなぐストーリーによって、魅力はさらに大きくなるはずです。

世界農業遺産認定から10年。それまでは「個」の活動でしたが、国東半島宇佐地域全体のつながりとして「循環」を実感できたのではないでしょうか。今後は、活動の裾野を広げながら、気候変動などの環境変化の中でどのように工夫していくかが大切です。そのためには、先頭に立つみなさんや関わる人たちが笑顔で活動できることがカギになりそうです。

2023.11.22 水 パネルディスカッション2 「世界農業遺産を未来の世代に繋ぐ」

長岩屋修正鬼会保存会 会長

清末 恒昌氏

豊後高田市長岩屋において、国東半島宇佐地域の伝統行事であり、国指定重要無形民俗文化財にも指定されている「修正鬼会」の保存及び継承活動を行う。

私はUターンで故郷に戻ってきました。地域の伝統行事である「天念寺修正鬼会」は、保存会や地区の人が中心となって継承してきましたが、高齢化などから費用捻出が難しくなり、地域の皆さんからの寄付で持ちこたえてきました。祭で使う松明づくりは、地区出身者が地元に帰ってきて製作を手伝ってくれています。

コロナ禍でも「困難な時こそ開催が必要」と感じ、無観客で実施。これにより地区の結束力が高まりました。保存会を中心に組織を見える化し、また、長岩屋修正鬼会交流センターを有効活用しながら、1300年の伝統を後世につなげていきたいです。現在、会員は地区の在住者や地区出身者に限定していますが、地区の平均年齢が60歳以上と高齢化が進んでいます。松明づくりなど力仕事が難しい状態になり、担い手不足も課題なので、地域外からの参加者を受け入れるなど柔軟な態勢を整える必要があると思っています。

くにさき七島藺振興会 事務局長

細田 利彦氏

「七島藺」の産地消滅を防ぎ、産業として再生させるため、「くにさき七島藺振興会」において、七島藺のPR・販促活動に加え、後継者の育成活動等にも取り組む。

七島藺をきっかけに国東市との縁をいただき、安岐町の古民家を住居兼事務所として使っています。畳店として130年の歴史を持つ当社としても、畳表の材料として主流のイグサだけではなく、希少な七島藺の魅力に気づかされて活動をスタートしました。若手作家や農家との連携により、七島藺のブランド化に努めています。和モダン、ジャパンブランドとして確立することで、きちんと儲かる仕事にすることが目標です。近年では工芸体験や農業体験を通じて七島藺を知ってもらう機会も増え、国東市の新たな観光産業にもつながっています。ニーズは高まっていますが、後継者不足などを理由にそのニーズに応えられない現状もあります。後継者育成のためにも、まずはメディア等を通じて七島藺を広くPRし、より多くの人に知ってもらうきっかけづくりを続けていきたいです。七島藺の特性と風土が結びついているという点をもっと知ってほしいですね。

しいたけ生産者

宮本 浩吉氏

国東市安岐町で原木しいたけ栽培を行いながら、地元小学生の世界農業遺産体験学習の受入れをとおして、しいたけ生産の継承活動を行っている。

平成14年、50歳からしいたけ栽培をはじめました。発生時期の異なる品種栽培によって、収穫時の労働力を分散させています。また、品質を向上させるために、スギ林の適切な管理によって明るさを保つ人工ほだ場を設置・管理。さらに、成長散水や発生散水によって良品づくりにも努めています。また、新品種開発に向けて行政と協力しながら栽培管理も行なっています。地元安岐小学校の児童たちの体験学習受け入れも続けています。ほだ起こし、ほだ場づくり、収穫体験と、しいたけができるまでの流れを実際に体験した子どもたちは、実感としてしいたけづくりを理解してくれたのではないかと思います。伝統農法を次世代へ継承するためには、まず興味を持ってくれることが大切です。今後も、次世代を担う子どもたちが体験を通してしいたけ栽培の楽しさを知る機会となる活動を続けていきたいです。

姫島村役場企画振興課おおいた姫島ジオパーク専門員

堀内 悠氏

姫島村役場企画振興課おおいた姫島ジオパーク専門員として、ジオパークの普及啓発活動や教育・研究活動、ジオガイドの養成等を行う。

おおいた姫島ジオパークは、「火山が生み出した神秘の島」をテーマとして、2013年に日本ジオパークネットワークに加盟認定されました。私は2014年から姫島村企画振興課の専門員として普及啓発活動を行なっています。子どもたちを対象としたジオパーク学習として、小学生は、県内のおおいた豊後大野ジオパークの小学生との交流、中学生は県外ジオパークとの交流を行っています。他所との交流によって改めて地域の魅力を知り、未来に残す大切さを学ぶことが目的です。子どもたちが将来も住み続けられる地域を作るためには、教職員をはじめ多くの大人に関わってもらいながら文化や伝統、景観など、地域の魅力を守り伝えていく活動が必要です。人と自然がどのようにかかわっていくかを知るためには、世界農業遺産とジオパークとで共通するポイントは多いと思います。

社会福祉法人博愛会 住吉浜リゾートパーク園長　日本カブトガニを守る会大分支部長

釘宮 浩三氏

杵築市の守江湾の干潟に生息する「生きている化石」と呼ばれるカブトガニの保護・継承のために、保護育成活動や各種観察会を行う。

「日本カブトガニを守る会」は全国に7つの支部があり、大分県では2001年から守江湾に生息するカブトガニ等の調査・研究を続けています。産卵地の清掃活動や砂嘴(さし)の保護、幼生観察などの他、地元の小中学生に向けた干潟観察会の実施、教育旅行の受け入れなどを通じて啓発活動を行なっています。2007年に開催された「第一回アジア太平洋水サミット」では、杵築市を会場に「宝の海守江湾会議」「アジアこども水サミット」のオープニングイベントも企画しました。

海は、食物連鎖の場として生態系が維持されていて、守江湾は干潟に住む生物の研究もできる希少な地域です。近年は気候変動によって水揚げされる魚が変化しています。海を環境教育の場として体験学習に活用できるよう、マリンスポーツやクラフト教室など海に親しむイベントを継続しながら、豊かな海を守るための広報活動も積極的に行なっていきたいです。

大分県漁業協同組合日出支店　漁業運営委員長

中山 公夫氏

漁師たちによる植樹活動を日出町豊岡の「漁民の森」において行い、若手漁師へ「海と山のつながりの大切さ」を伝える植樹活動の継承に取組んでいる。

雨がしみ込んだ山からの栄養豊富な地下水が海へと流れることでプランクトンが発生し、魚が育つ海になることから、日出町豊岡の「漁民の森」で、漁師たちによる植樹活動を30年以上継続。植樹活動を通じて若い漁業者への環境教育の一環にもつながっています。また、小中高生に向けた観光漁業就業体験では、日出町でとれる魚について現地で説明、体験をしてもらうことにより、漁業への新規就業者確保を図っています。

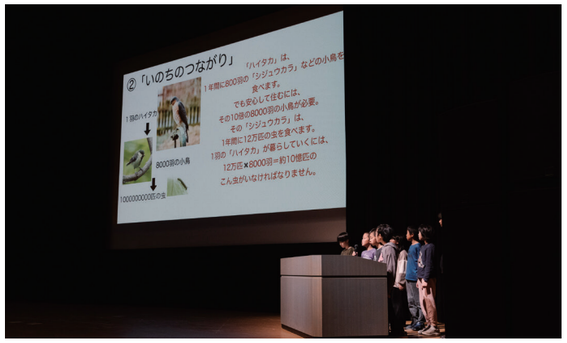
地元名産の城下かれいの生息地を巡る漁船観光クルーズツアーや、大神漁港の朝市の開催などによって、広く一般の人に海や魚の魅力をアピールしながら、漁師の収入確保を目指しています。朝市には近年観光客も増えつつあり、地元の魅力発信にも貢献できていると思っています。今後も「山と海のつながり」を学習できる機会や、漁師の仕事を知ってもらう機会を増やしながら、地元PRにも貢献していきたいです。

2023.11.22 水

記録動画

ユース取組発表

大分県内の小・中学校で、世界農業遺産にまつわる取り組みを行なう5つの学校によるユース取組発表。
「地域における世界遺産」について、それぞれの視点でとらえた課題をおさえながら、
地域のみなさんへ直接お話を聞いたり、現場に足を運んだりして学習した内容を発表してくれました。
取材を通じて感じた率直な意見や、課題に対する解決方法など興味深い内容が多く、
若者ならではの視点や考え方は大人たちにとっても、参考になる意見が多くありました。



生態系を育むホタルの里の、美しい景観を守りたい。

豊後高田市立田染小学校

（河野優太さん、河野真子さん、河野環子さん、酒井賀椰さん、髙田遼さん、永廣奈々緒さん増田直輝さん、増田唯さん、道脇綺乃さん）

全校児童28名の田染小学校。学校のそばには熊野摩崖仏や富貴寺などがあり、「仏の郷田染」の宝として守られてきました。15世紀から変わらないまちの美しい景観は、ユネスコ未来遺産にも認定されています。

ホタルの里としても有名ですが、地域の人の話では昔はもっとホタルの数が多かったそうです。麦わらで作る蛍籠も編んでみました。たくさんの人にホタル観賞を楽しんでもらおうと、川のゴミ拾いや草刈りをしていると聞き、地域の人のおかげでホタルが見られるんだと知りました。

また、くぬぎ林とため池の関係について林先生に教えてもらいました。世界農業遺産に認定された理由を考えていると、雑木林がCO2削減をもたらすことを知り、世界農業遺産とSDGsとのつながりを見つけました。これからも自然を身近に感じながら、未来へつなげて守っていきたいです。

動物たちの命の循環を育む、地域の循環。

宇佐市立津房小学校

（安部菜月さん、衛藤結希菜さん、衛藤龍一さん、遠嶋颯斗さん、山﨑和奏さん、樽松蓬さん、小島大空さん 遠嶋美咲さん）

学校裏の畑で、全校児童30人で野菜作りをしていて、給食で食べたり、農産物販売所で販売したりしています。宇佐市安心院町・院内町では小中高一貫教育の「地球未来科」も設置され、地域について主体的に学ぶ探求学習が取り入れられています。

世界農業遺産と津房を結びつける要素として、クヌギ林の見学や原木しいたけ栽培にも挑戦。また、日本文理大学の杉浦教授から「いのちのつながりと世界農業遺産」についてのお話を聞き、クヌギ林と人が多様な生活環境をつくっていることを学びました。さらに環境が良いところにしかいない絶滅危惧種の鳥「サシバ」が津房に生息していること、多様な鳥たちのエサとなる虫が多くいて食物連鎖が行なわれていることなど、生物を育む水と自然がある津房の魅力を学びました。そして、日常の風景に循環が隠れていることがわかりました。

山から川、守江湾へ。ひとつの輪となって循環する自然環境。

杵築市立大田小学校

（秋吉結心さん、田多萌子さん、長谷雄銀士さん、三浦陽翔さん）

どぶろく祭りで有名な杵築市大田地区は、しいたけ栽培も盛んでした。まず、林先生から「しいたけを食べると地球温暖化を防げる」とのお話を聞きました。しいたけの消費量が増えればクヌギが必要となり、クヌギが増えると光合成量も増えて、CO2の吸収につながります。

次に、ため池の改修工事の見学に行き、杵築市には329か所ものため池があり、改修が繰り返されていることが分かりました。暮らしを支えるため池を地域で守り、大切にしなければなりません。続いて、守江湾のカブトガニの観察にも行きました。

生きた化石と称される珍しいカブトガニが生息しているのは、山の養分を含んだ栄養豊富な水が流れて、山・ため池・川・海の循環システムが暮らしを豊かにしていることを改めて学びました。川から流れてくるゴミの現状も知り、私たちができることを真剣に考えなければと思いました。

豊後高田そばの歴史を知り、地域経済活性化と自然環境を考える。

豊後高田市立高田中学校

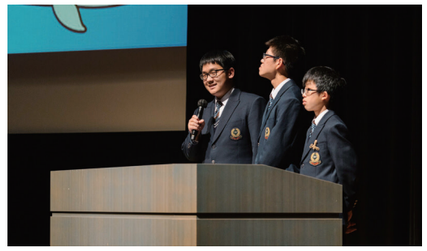
（吉田さくら晴蘭さん、髙橋潤さん、滝口雄大さん、平山沙依さん、中川暖麻さん）

観光需要が高まれば、地域活性化するのではないかと仮定。豊後高田市では昭和の町、真玉海岸、豊後高田そばなどが人気があることがわかり、「豊後高田そば」に焦点をあてて調べるためにゲストティーチャーに来ていただきました。昭和の町に合う農作物であること、減反政策によって2005年からは秋そばだけでなく春そばの栽培もスタートしたことを知りました。2009年には新種の「春のいぶき」の作付けを始め、高品質なそばとして知られるように。生産者からは「農業は大変だけど、地域の人と協力して成功させる面白さがある」という言葉も聞きました。6次産業化によるブランド価値向上、そば職人の養成、手打ちそば認定店制度など、ここ20年の取り組みで地域を代表するグルメになりました。これからもそばが育つ環境を守るために、私たちにできることを考えていきたいです。

地域の伝統に見る、これからの循環型社会と豊かさ。

大分中学校

（酒見陸斗さん、平野壮磨さん、渡邊颯太さん）



世界農業遺産教育旅行体験プログラムモニターツアーで国東半島を訪れ「豊かさが循環する地域をつくるために必要なこと」を考えました。豊かさには、自然的・文化的・社会的などがありますが、自然的豊かさなくしては本当の豊かさはないと感じました。海洋プラスチックなどのゴミ問題も、人がポイ捨てしたゴミをお金をかけて処分するという矛盾によって、経済に悪影響をもたらしています。国東半島で体験した自然と農業に関する学習を通じて、ため池同士がつながっていること、クヌギ林へと供給され、森林の新陳代謝が行なわれていることを知りました。国東の人たちは、伝統的な「農林循環システム」によって、自然を守りながら活用することでまちを豊かにしています。これからも自然と共生し、豊かさが循環する社会を目指すためには、国東半島宇佐地域でのこれまでの取り組みがSDGsの観点からも重要なポイントだと感じました。

2023.11.22 水

聞き書きユースセッション

記録動画

「聞き書き」ってなに？

聞き書きとは、農林水産業にまつわる名人、職人、生産者の話を聞き、文字に起こして残す活動。その人の生き方を丁寧に取材し、行間をうめる作業でもあります。

長時間にわたる取材は、人生を丸ごと受け止める時間でもあります。農林水産省や文部科学省などが主催する「聞き書き甲子園」では、高校生が全国各地で取材を行なっています。

国東半島では世界農業遺産認定の年からこれまで300人以上の高校生が参加し、地域の人にお話を聞いてきました。

コーディネーター

NPO法人共存の森ネットワーク
副理事長
吉野　奈保子氏

「聞き書き」を通じて名人と関わり、記録し、集積してきた「知」を分かち合うことで、その生きざまに共感し、実践する人を増やしていくために継続して活動に取組む。平成26年から国東半島宇佐地域世界農業遺産の「聞き書き」事業のコーディネートを担当。

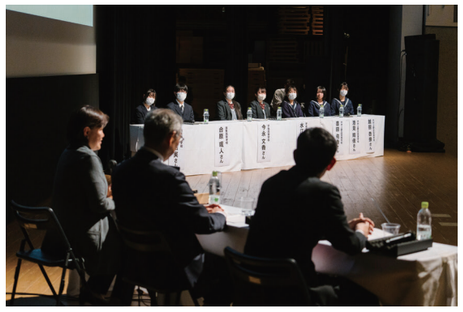
東京大学大学院
農学生命科学研究科　教授
八木　信行氏

東京大学大学院
農学生命科学研究科　教授
香坂　玲氏

「わかったつもり」にならない。
「聞いただけ」では終わらない。

聞き書きは、取材した内容を一人語りの作品に仕上げていきます。お話を聞くときに重要なのは「わかったつもり」にならないこと。わからないことは素直に聞き、深掘りして質問することがポイントです。

また「聞く」だけで終わらないことも大切です。お話を聞いて大切に思ったこと、共感することは何でしょうか。地域でできることや日常に生かせることはありませんか。そこには、持続可能な未来を考えるヒントがあるかもしれません。



時間をかけて傾聴すること。

聞き書きには、長い時間と手間がかかりますが、名人の話を聞き、書き起こす過程にこそ価値があります。

録音を聞き直し、言葉の意味や真意を深く理解しようとするからこそ相手を敬愛する気持ちも生まれます。そして話し手と聞き手の共同作業によって、何ものにも代え難い作品が完成するのです。農林漁業の営み、そして先人が築いてきた伝統的な暮らしや文化によって、日本列島の里山里海の豊かさは維持されてきました。目の前にある、その美しい風景は、多くの人々の営みによって成り立っています。聞き書きを通して、そのことも考えてみてください。

現代に「聞き書き」が果たす役目とは

聞き手が次世代を担う若者である点にも意義があります。名人が歩んできた道のりを受け止める時間は、これからの生き方を考えるきっかけにもなるからです。人生の先輩たちの地に足の付いた言葉のひとつひとつが、一歩を踏み出す勇気につながるかもしれません。

聞き書きは人と人、人と自然、そして異なる世代がつながるための、ひとつの手段なのです。今の時代は「要点をわかりやすく伝えればよい」という風潮がありますが、聞き書きは一言一句を書き起こし、その人の語り口を大切にしているからこそ貴重な記録になります。なぜならば、単なる技術やノウハウだけではなく、その人の生きざまや価値観、個性が、その人自身の言葉で表現されるからです。

AIの進化はますます加速しますが、直接お話を聞き、相手の答えを待ち、出てきた言葉をあたたかみのある形で伝えられるのは人間だけです。

今回参加してくださった高校生のみなさんにとって、この経験がこれから先の人生を歩むための一助になれば幸いです。

「共存っちゅうのは、人間もお互いを理解しながらやっていくように、
農業でも、自分たち農家ばっかりが思うようにっちゅうてもそれは無理と思います。
人間も食料を求めるために環境に悪影響を与えるから。お互いに我慢しながらやっていかんといけんのかな。」

名人　原木しいたけ生産者　**清原 米蔵さん**（循環型農業）

聞き手　**豊田 佑香さん、池見 晴佳さん、越智 杏奈さん**
（大分県立大分上野丘高等学校）

時間がない中での作業は大変ではありましたが、それ以上に楽しかったという感想の方が強いです。大分県で生まれ育ったにもかかわらず、原木しいたけやその栽培方法についてあまり知りませんでしたが、お話を聞くほどに興味深い内容でした。

「自然との共生」というお話は、若い世代の私たちが解決すべき問題だと感じました。害獣被害があるというお話を聞き、これまでは「動物は守るべき存在」だと思っていたけれど、自分がもし生産者の立場だったら、本当に動物を大切にできるかなとも考えさせられました。清原さんの思いは、生産者として自分のことだけを考えるのではなく、自然も動物も、全てを思いやる気持ちがあるからこそ出てくる言葉ばかりでした。また、お話の端々から山での仕事が大好きなんだということが伝わってきました。仕事に情熱的に打ち込み、心から仕事を愛していることがわかりました。

コーディネーターより

聞き書きによって得られた気づきや共感は大切ですね。現場を直接訪ねたからこそ、みつけた課題もあるでしょう。農林業の後継者不足や、農山村の過疎高齢化は全国的な課題です。移住者や後継者を積極的に受け入れ、知恵や技術、道具を共有し、誰もが参画できる形を模索することも大切かもしれません。荒れていく里山や耕作放棄地を保全していく助けになるでしょう。

「日本の大切な伝統産業だから、誇りを持ってこの仕事を続けています。
若者にこの産業を継いでもらいたいです。」

名人　七島藺農家　**諸冨 康弘さん**（伝統産業）

聞き手　**小玉 結実さん、合原 颯人さん**
（大分県立国東高等学校）

今回、諸冨さんにお話を聞いたことで、七島藺の生産には、病気や害獣の対策、背が高くなり過ぎないように網を張る作業、手作業での刈り取りなど、大変な労力がかかることを知りました。畳表の材料として良質なものを生産するためにこれだけの手間がかかるとは思ってもいませんでしたが、だからこそ国東半島の七島藺には大きな価値があるのだと感じました。

地域の伝統を守るためにサラリーマンから農業へ転身したという生き方もカッコいいと思いました。諸冨さんの言葉にもあるように、後継者の育成や伝統産業の継承は大きな課題だと思います。伝統としては残していきたいし応援したいと思いますが、もし自分が受け継ぐ立場になったら大変だなというのが正直なところです。職人の手作業が価値を育む産業ですが、機械などを取り入れながら進化できればいいのではないかと感じました。私たちも将来は、農業に関わる仕事に携わりたいと思っています。

コーディネーターより

七島藺は、栽培から収穫、選別、織りまで、大変手間がかかります。でも、その苦労と、手作業だからこその魅力をきちんと伝えられれば、その価値に共感する人も増えるかもしれません。作り手の思いを伝えるためには、聞き書きも役立つでしょう。
作り手の思いが消費者に伝われば、共感の輪が広がり、七島藺を使った新たな商品や後継者も生まれるかもしれません。

「だからなんとかこの産業を残していかなければならないって、今頑張ってるんです。」

名人　農林業自営、国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会会長　**林 浩昭さん**（農林業自営・会長）

聞き手　**今永 文香さん、梶原 実桜さん、山田 瑠華さん、水江香乃さん**
（大分県立宇佐高等学校）

林さんはこれまでのご経歴の中で研究してきたことをいかしながら、農業にも取り組まれています。まさに「半農半X」の新しい生き方だと思いましたし、好きな分野を研究し続けている姿に憧れます。農家になることには少しハードルの高さを感じますが、自分が食べる分は自分で作ってみたいという思いが強くなりました。

若者の中には農業は大変そうと思っている人が大半だと思いますが、林さんのような農業と他の活動を両立している人の存在や、どのように取り組んでいるかを知る機会が増えれば、農業をやってみたいと思う若者も増えるのではないでしょうか。そのためにはまず農業を知るきっかけをつくるために、SNSなどで情報を発信することで、若者の目にとまる機会も増えると思いますし、「大変そう」から「楽しそう」へと、イメージの変化も起こると感じました。

コーディネーターより

経済は、短期的な収益拡大を目指すために「選択と集中」を強める傾向があります。でも、これからは包摂性や多様性も必要です。個人の働き方は「半農半X」や「二拠点居住」など、多様な選択肢を選べる時代になりました。自給自足や交換、贈与、リユース、シェアなどの「非貨幣経済」も日々の暮らしや私たちの幸せを支えています。有限な地球（限られた資源）の中で、人類が持続可能であるためには、「百姓」として生きてきた、かつての日本人の知恵や価値観を今に蘇らせることも大切でしょう。

[高校生が感じたこと、提言]

変わらないでほしいこと、かわるべきこと。

コーディネーターの吉野さんから高校生へ、「形あるものをそのままの形で残していくユネスコの“世界遺産”に対して、“世界農業遺産”は次世代に継承するために変わっていくことも許容する遺産です。みなさんにとって、変わらず残していくべきものと、変わるべきものは何だと思いますか?」と問いかけがありました。それぞれが向き合った「聞き書き」の現場を通して感じた意見を述べてくれました。

- 農業に対する思いや人のつながりはこれからも変わらないはずです。農業で何が得られるのかや、農業従事者の生き様を知る機会として、地域と関わる授業を増やすことで接する機会が増えれば若者にも伝わると思います。背景を知ると気持ちが動くはずです（上野丘・越智さん）
- 農業に携わる現場の人の思いは変わりません。重労働のイメージが強いので、機械化なども進めながら若者が農業に携わりやすくすることも大切だと思います（上野丘・池見さん）
- 原木しいたけ栽培の伝統農法は変わらずに続いてほしいですし、若手がつなぐべきだと思います。後継者不足の問題があるので、大人数で分担して農業ができる仕組みができれば、兼業や気軽に農業に参入する若者も増えるはずです（上野丘・豊田さん）
- 人とのつながりや、地域遺産を保護する活動はこれからも変わらないでほしいです。農業に関心を持ってもらうためにSNSなどを活用して、写真や文章で具体的に情報発信していく必要があると思います（宇佐高校・水江さん）
- 産業を残していきたいという現場の思いはずっと変わりません。半農半Xの考え方がもっと広がれば、新規就農者が増えるのではないでしょうか。（宇佐高校・今永さん）
- 七島藺の文化は変わらずに残していきたいです。変えたいのは、売り手（生産者）と買い手の価格面の認識の差です。七島藺の価格が下がっていると聞いたので、イベントなどでもっと多くの人に知ってもらい、付加価値を高めたいです（国東高校・合原さん）
- 七島藺は手作業の手間こそがいいものを作るので、機械化せずに手作業の良さを残してほしいです。その大変さに価値があることを伝えていくための情報発信の方法を進化させるといいのかもしれません。（国東高校・小玉さん）

国東半島宇佐地域世界農業遺産
認定１０周年記念シンポジウム記録冊子

[日時]　2023 年 11 月 21 日、22 日

[会場]　くにさき総合文化センター（アストくにさき）

[主催]　国東半島宇佐地域 世界農業遺産推進協議会

[事務局]　大分県農林水産部農林水産企画課

＜発行・お問い合わせ＞

国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会

（事務局）大分県農林水産部農林水産企画課

〒870-8501　大分市大手町３丁目１番１号　TEL 097-506-3525